

舟宿「のま池」の挑戦 ～ 定置網漁業の多角経営の取組み ～

南さつま漁業協同組合 野間池本所 宮内 洋次

1 地域の概要

私たちが生活している南さつま市は、薩摩半島の西端に位置し（図1）、美しい稜線を見せる野間岳のすそ野にあり、農林水産業の盛んな地域である。

平成17年11月に近隣の加世田市・笠沙町・大浦町・坊津町・金峰町の1市4町が合併し「南さつま市」となった。

現在の南さつま市の人口は約3万4千人、海岸線の北西部は砂丘地帯、南西部は変化に富んだリアス式海岸を形成し、坊野間県立自然公園の指定を受けた景勝地を有している。

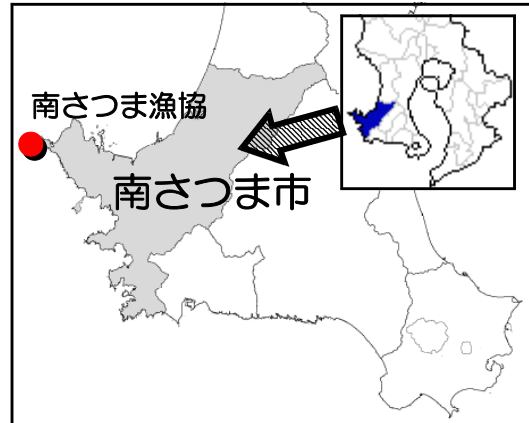


図1 南さつま漁協の位置図

2 漁業の概要

私が所属している南さつま漁業協同組合は、平成17年に野間池漁協と秋目漁協、平成24年には久志漁協と合併してできた漁協である。平成30年度の組合員数は、242名（正組合員 79名、准組合員 163名）で、高齢化が進み組合員数は減少している。

管内では豊かな海岸線を利用して、定置網を始め、魚類養殖、曳縄、刺網、一本釣りと多様な漁業が営まれている。

私が所属する南さつま漁協野間池本所の平成30年度の水揚量は 426トン（図2）、水揚金額は 190百万円（図3）で、その約3割以上を定置網漁業が占め、漁協の主力漁業となっている。

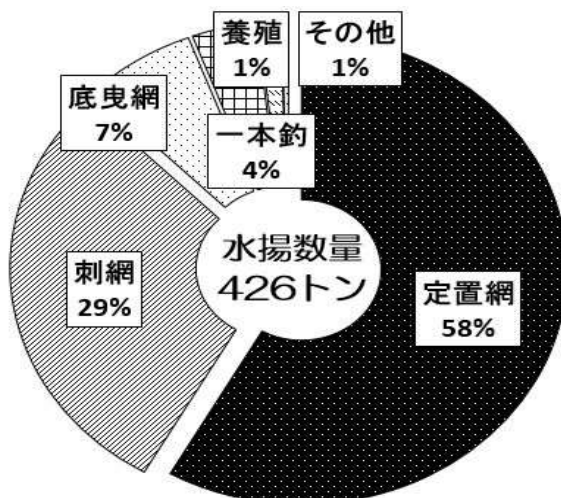


図2 平成30年度 南さつま漁協
野間池の水揚数量（他港含む）

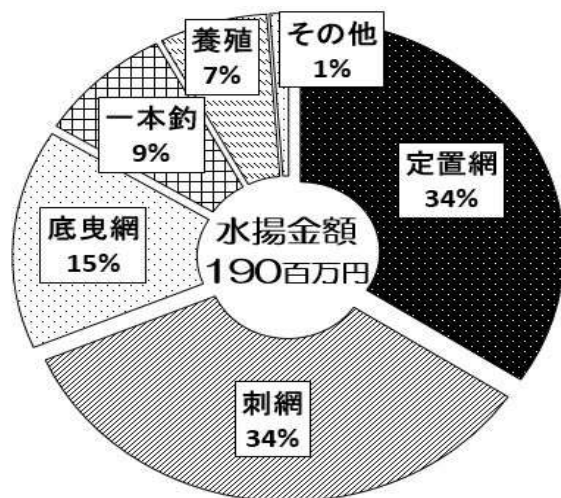


図3 平成30年度 南さつま漁協
野間池の水揚金額（他港含む）

3 研究・実践活動取組課題選定の動機

私は、昭和54年に地元、笠沙町で生まれ、父の漁業を見て育った。父は、鹿児島県が認定した漁業士として広く活動し、率先的に新しいことに挑戦していた。

平成3年8月、私が小学生の頃、観光漁業を見据えて、観光に利用できる定置網漁船「第十しろせ」を建造した（図4）。定置網漁船の多くは、作業場が広く操舵室は極力小さい船型であるが、「第十しろせ」は、観光ができるよう利用客スペースを広く確保しているのが特徴である。

さらに、父は、平成8年、観光定置網の利用客に定置網の獲れたての魚を食べてもらおうと、多角経営の先駆けとなる「海鮮処 のま池」をオープンさせた（図5）。

私は、漁業は獲るばかりではなく、いろいろなやり方があることに魅力を感じ、地元で漁業に従事する際、必要な知識や免許を取得するため、高校卒業後は、愛知県の専門学校へ進んだ。

はじめに調理師、次に潜水士の免許を取得した後、ダイビングのインストラクターの資格も取得した。その後、沖縄でダイビング・インストラクターに従事し、経験を積んだ後、平成17年、25歳の時に地元に戻り、父親と一緒に定置網漁業に従事するようになった。



図4 第十しろせ（平成3年建造）



図5 海鮮処 のま池（オープン時）

4 研究・実践活動の状況及び成果

(1) 多角経営化の取組

父が始めた観光定置網は、県内でも先駆けで人気を博し、食堂事業も近隣に食事のできる場所が少なかったこともあり、定置網で漁獲された朝どれの鮮魚を使った料理が好評であった。定置網漁業の特徴として、多種多様な魚介類が漁獲されるので、水揚げ数量は多いが、単価が低いという欠点がある。少しでも魚価を上げるには、消費者へ直接、提供できる食堂はうってつけであった。

しかし、観光定置網は、開始した当初は物珍しさも手伝い、多くの利用客で賑わったが、定置網の出港時間は朝早く、地元で宿泊する場所もなかったため、遠方からの利便性の悪さもあり、利用は年々、減少していった。漁船も観光定置を考慮して建造したので、利用客を増やすことが課題であった。

このような悩みを抱えていた平成12年頃に、近隣に宿泊もできる観光施設「笠沙恵

比寿」がオープンし、その宿泊者を受け入れることで観光定置の利用客が、少しずつ増えていった。

さらに観光事業に力を入れるべく、ダイビングのインストラクターの資格を活用し、ダイビング案内に取り組んだ。野間池周辺の海は起伏に富み、魚群と遭遇できる機会が多いので、ダイビングには最高の環境である。しかし、シャワー施設や休憩所がなかったので、この課題を解決すべく一念発起し、私が帰郷してすぐの平成17年に宿泊施設を備えた「舟宿のま池」をオープンした。

「舟宿のま池」がなかった頃は、観光定置の利用客は、日の出前に出港、8時頃に帰港するので、食堂で朝食を食べたら帰ってしまっていた。しかし、ダイビング案内の利用客は、食事や宿泊まで利用してもらえるほか、潜水用タンクのレンタルやタンク・チャージ等のサービスに伴う収入増などのメリットがあった。利用客に、一日中楽しんでもらえるばかりではなく、帰りに近隣の観光施設に立ち寄ってもらえる等、地域の振興にも大いに役立っている。

このように、定置網だけに頼らない多角経営を進め（図6）、現在では、定置網事業は父が主に担当し、観光や民宿事業などは主に私が担当する役割分担が確立している（表1）。

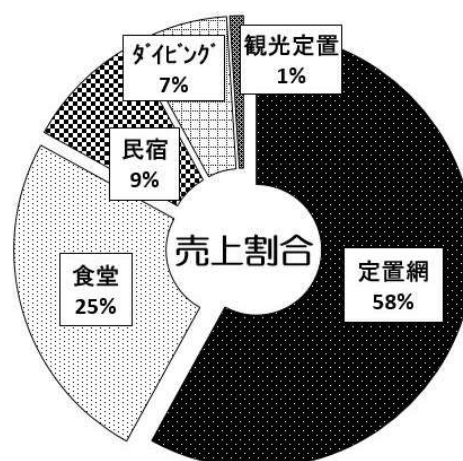


図6 各事業の売上割合 (H24)

表1 事業の概要

事業名	概要	従業員数	役割分担
定置網事業	白瀬定置網	6名	父が主に担当
観光事業	定置網従業員が兼務	(定置網が兼務)	私（接客など）
食堂事業	座席数 50席	4名	私（調理担当）
民宿事業	和室3室、洋室2室	1名	私
ダイビング案内	タンク・レンタルやチャージ等	1名	私

(2) 省力化の取組

①定置網事業

年々、魚価が下がり、定置網漁業の水揚げ額も下がつつある（図7）。

高い賃金が支払えないうえ、定置網の水揚げから市場への出荷、網の補修等、就業時間が長いイメージがあるのか、なり手がおらず従業員の確保が大きな課題であった。

そこで就業時間を短くすることに

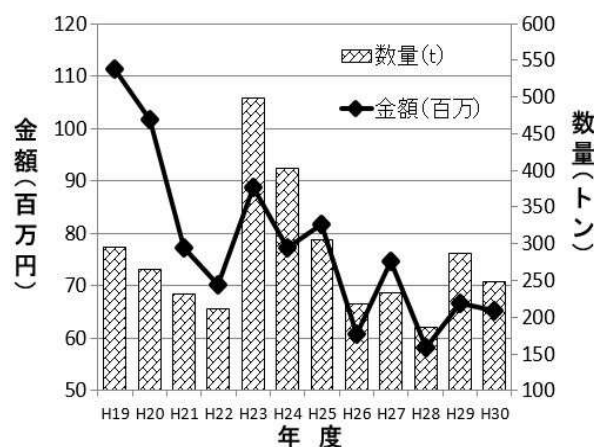


図7 野間池地区の定置網漁業の水揚げ推移

した。半日勤務にすることで、地域の出身者で、一線を退いた、いわゆるリタイアした方が働ける環境を作った。

彼らは、自分の時間を楽しみ、故郷でのんびり暮らしたいと思っているので、働くにしても半日程度と考えている人が多い。雇用するこちらとしても船上作業に習熟した乗組員が確保できるので、双方にとってウィンウィンである。

これまでの勤務形態は、従業員全員で出荷作業や網の補修を夕方まで行っていた。半日勤務にするため、時間内に作業を終えるよう、出荷と補修に分けて作業するよう見直した。ベテランの従業員は、網の取扱いに習熟しているので、短時間でも網の補修が行える。

また、網の設置や交換も、これまでは船上でのみ行っていたので、腰に負担のかかる重労働で時間がかかっていた。そこで自分のダイビング技術を活かし、潜水して網の取り付けや、取り外しを行うようにしたところ、3時間以上要していた網の交換が1時間程度と、2時間以上の大幅な短縮ができた。もちろん、ベテランの従業員だから、あうんの呼吸で作業が素早いことも大きな要因である（表2）。

そのため、網を設置した翌日であっても、天候が急変した場合には、素早く網を撤去できるようになり、台風等の被害を受けることもなくなった。おかげで、安定的な操業が可能になった。

表2 従業員の作業時間の比較

作業名	省力化前	見直し内容	省力化後
網揚げ	2時間	—	2時間
出荷作業	2時間	時間を限定し、出荷と補修に分けて作業	2時間
網の補修	4時間		
網の交換	3時間	潜水して網の取外し	1時間

②食堂事業

調理師の資格を活かし、私が主に調理を担当し、パートの方々に配膳や後片付をしてもらう方法で運営している。こちらも、以前は夕方まで営業していたが、現在は、昼食時間の3時間のみに変更した。パートを半日勤務としたことで、地域のおばちゃんの雇用の場になっている。営業時間を短くしたため、食堂の利用客数や収益は落ちたが、代わりに地域の冠婚葬祭（法事等）の会食のオーダーを受けるようにした。これにより収益を補うことができた。

5 波及効果

(1) 多角経営の取組の波及効果

民宿と食堂経営に加え、観光定置やダイビング案内等と事業の多角経営化に取り組んできた。この取組みがあったから、ウミガメ保護活動や県の担い手育成事業への協力も行えるようになったと思っている。

ウミガメは、定置網や刺網で混獲され、漁獲物に傷をつけるので漁業者にとっては厄介者だ。しかしながら、観光定置やダイビングで出会うウミガメは、観光客に大人気の

貴重な観光資源でもある。ダイビング案内を始めるようになってから、「ウミガメが生きていけないような環境では魚も人間も生活できない」と考えるようになり、次第にウミガメに興味を持つようになった。ちょうどその頃、ウミガメの研究者が野間池を訪れ、定置網で混獲されるウミガメを測定し、タグを付けて放流する調査研究の協力を依頼された（図8）。現在も、毎月、データを提供し、研究に協力している。

また、この調査協力がきっかけとなり、鹿児島大学のウミガメ研究にも協力するようになった。現在も、学生数名が研究のため野間池を、毎月、訪れている。

さらに、その縁で全国各地の水族館ともつながりができ、ウミガメばかりではなく、鹿児島に生息する海洋生物の調査や展示用の魚介類の提供にも協力している。この活動により、多くの学生や研究者が野間池を訪れるようになり、地域振興とともに交流人口の増加が図られているのは、大変、喜ばしいことだ。

また、野間池は、漁業種類が多く、研修を実施しやすいことから、県からの依頼を受け、「かごしま漁業学校」という担い手育成事業にも協力している（図9）。この研修を受けた生徒の中から、数名が長期研修を経て、南さつま市の野間池に新規就業している。「かごしま漁業学校」には、これからも協力していきたい。そして、一人でも多くの担い手が育ってくれることを期待している。



図8 ウミガメに標識を装着



図9 かごしま漁業学校への協力

(2) 省力化への取組の波及効果

就業時間を半日にしたことにより、地域の高齢者が働けるようになったばかりではなく、短期間雇用も可能になり、地域の新規就業者への支援にもつながっている。新しく漁業を始めたばかりの方々は、水揚量が安定せず、生活に困ることがある。水揚げがある時期は、自分の漁業に集中すればよいが、水揚げが少ない時期は、定置網を掛け持ちすることで、収入を安定させることができるからである。また定置網は、網の補修も行うので、ベテラン従業員から網の保守管理技術を習得できる学びの場ともなっている。

6 今後の課題や計画と問題点

私の家は代々、定置網を営み、私も、私の父も、Uターンして漁業を引き継いできた。地域で漁業を継続するために、現在の漁業のスタイルを確立していった。父とともに漁

業に従事し、水揚げした魚は、主に近隣の笠沙町漁協の市場へ出荷しているが、仲買が減り、魚価が上がる要因は少ないと感じている。漁家経営は厳しいが、食堂や観光事業等、多角化したから生き残ってこられたと感じている。

しかし、父が始めた「海鮮処のま池」は、平成27年8月の台風で全壊する被害を受けた。やむなくダイビングの休憩施設であった「舟宿のま池」(図10)の1階を改装し、翌年の平成28年5月から食堂として再開した(図11)。



図10 建設当初の「舟宿 のま池」



図11 食堂へ改装後の「舟宿 のま池」

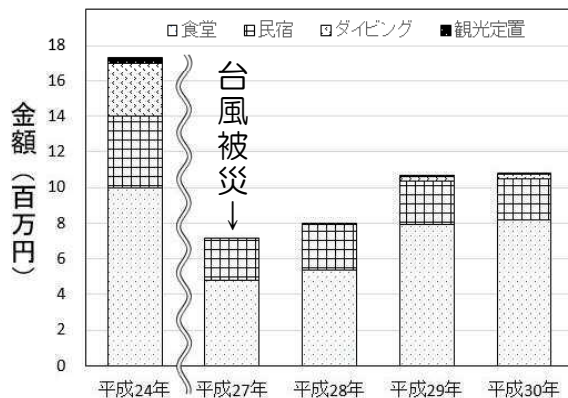


図12 定置網を除く各事業の売上推移

※ H25, H26の売上データは台風災害により失われた

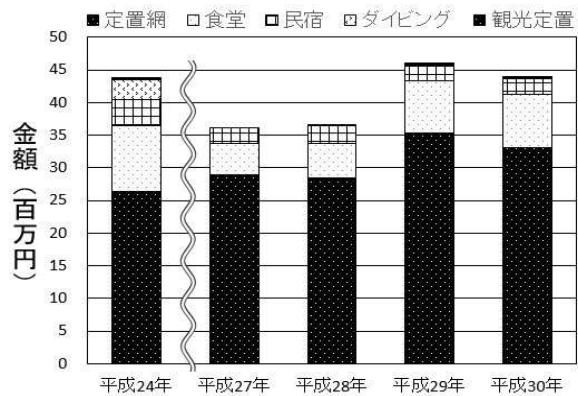


図13 各事業の売上推移

食堂は再開できたものの、舟宿はもともと大きな施設ではなかったので、客席数が半減したことに加え、休憩場所がなくなった。ダイビング案内は営業できず、売上げも大きく落ち込んだ(図12)。しかし、台風災害のあった平成27年以降は、幸い、定置網の水揚げが上向いたので、食堂や民宿等の減少を補うことができ(図13)、経営の多角化が事業の安定に役立った。

また、現在、南さつま漁協の正組合員の79名のうち40歳前後の組合員は、野間池地区では私を含め3名しかいない状況である。私を除く2名は、県が行う「かごしま漁業学校」を経て、野間池で漁船漁業に新規就業した方々である。「かごしま漁業学校」が野間池で開催されたからこそ、野間池に就業する契機となったと思うので、これからも協力し、担い手が育ってくれることを期待したい。

最後に、地方の漁業経営は、人口減少や魚価の下落に加え、資材や燃油等経費の上昇

により、極めて厳しい状況にある。野間池地区の定置網漁業は、これまで3統あったが、水揚量は安定していたものの、魚価の下落と網代等の経費の上昇に耐えられず、1統は廃業し、現在は2統となっている。私のところは、食堂や民宿など多角経営で水揚金額の下落をなんとか補えている状況である。経営の柱である定置網漁業の水揚金額を増やす方法として、出荷しても値がつかない雑魚を加工し付加価値を高めることやダイビング案内を再開する等、今後とも、定置網漁業を柱に多角経営をさらに発展させ、水揚量に影響されない安定した漁業経営を目指すとともに、ウミガメ調査や県の担い手育成への協力を継続し、地域の振興に貢献していきたい。